

名城信夫選手なしろのぶおの葛藤

平成十七年四月三日。大阪市IMPホールで、ボクシング日本スーパーフライ級タイトルマッチが行われた。チャンピオン田中聖二選手はサウスポーで多彩なパンチをくりだすテクニシャン。前年十一月に王座を奪い一月に結婚、心身ともに充実した中での初防衛戦だった。一方、挑戦者の名城信男選手は、テクニクでは数段劣るものの、左右の重たいパンチを放つ典型的なハードパンチャー。キャリアとテクニクで勝るチャンピオン田中選手に対して、プロ六戦目ながら「必殺パンチ」が魅力の名城選手。見所の多い対戦だった。

試合は前半から名城選手が攻めた。序盤は王者のディフェンステクニクに攻めあぐんだが、持ち前の強打で徐々に田中選手を追い込んでいく。ラウンドが進むにつれ、攻撃力で上回る名城選手が田中選手を圧倒していった。少なくとも周囲からはそう見えたのだが、名城選手は自分の方が圧倒しているとはまったく思っていなかったようだ。

僕は、挑戦者だったし、聖二さんには、アマチュア時代に負けてばかりでしたから判定にもつれこむのも嫌でした。『どにかく前に出よう。ラッシュをかけよう。そうでないと聖二さんが盛り返してくる。』そう思っていました。そして、運命の第十ラウンド。名城選手の左右のストレートが三発続けてヒットしたときレフェリーが止めに入った。名城選手のTKO勝ち。チャンピオンは頭からつんのめり一回転しリングに沈んだ。が、しばらくすると立ち上がり笑顔で新チャンピオンを祝福した。

「やっぱお前、強かったわ。ありがとう。」

田中選手と名城選手は「拳友けんゆう」ともいえる間柄あいだがらだった。名城選手がチャンピオン田中選手に挑戦する一つ前の試合。対戦相手は当時すでに世界ランカーだったサウスポーのテクニシャン本多秀伸ほんだひでのぶ選手だった。無謀むぼうな挑戦」と周囲から言われたこの試合に向けて、サウスポー対策のスパarringsをこころよく引き受けてくれたのが田中選手だったのだ。名城選手はこう語る。

本当にいい人でした。僕の方がスパarringsをお願いしたのに、いつも練習の最後には聖二さんの方が『ありがとう。』って言うってくれるんです。」

自分にとっては「恩人」とも言える田中選手を倒して新チャンピオンになった名城選手。勝負の世界の厳しさを実感させられるチャンピオン交代劇だった。しかし、ここまではボクシングの世界ではよくある光景と言っていいたろう。悲劇は試合終了後に起こった。

控室に戻った後で嘔吐おうとするなど、敗れた田中選手の症状が悪化し意識不明の重態におちいったのだ。すぐに大阪市の国立病院機構大阪医療センター病院に運ばれ、開頭して血を抜く手術を受けたが、試合の十二日後、四月十五日午後八時四三分、田中選手は帰らぬ人となった。

四月十八日に行われた田中選手の告別式。名城選手は藤原トレーナーと共に最前列にすわった。いたたまれない。

ほらほらあの人がそうよ…。」

心ない女性の声が聞こえた。通夜も告別式も、田中選手の所属していたジムの金沢会長からは、

無理することはない。」

と言われたが名城選手は、

やれる限りの礼を尽くさせてください。」

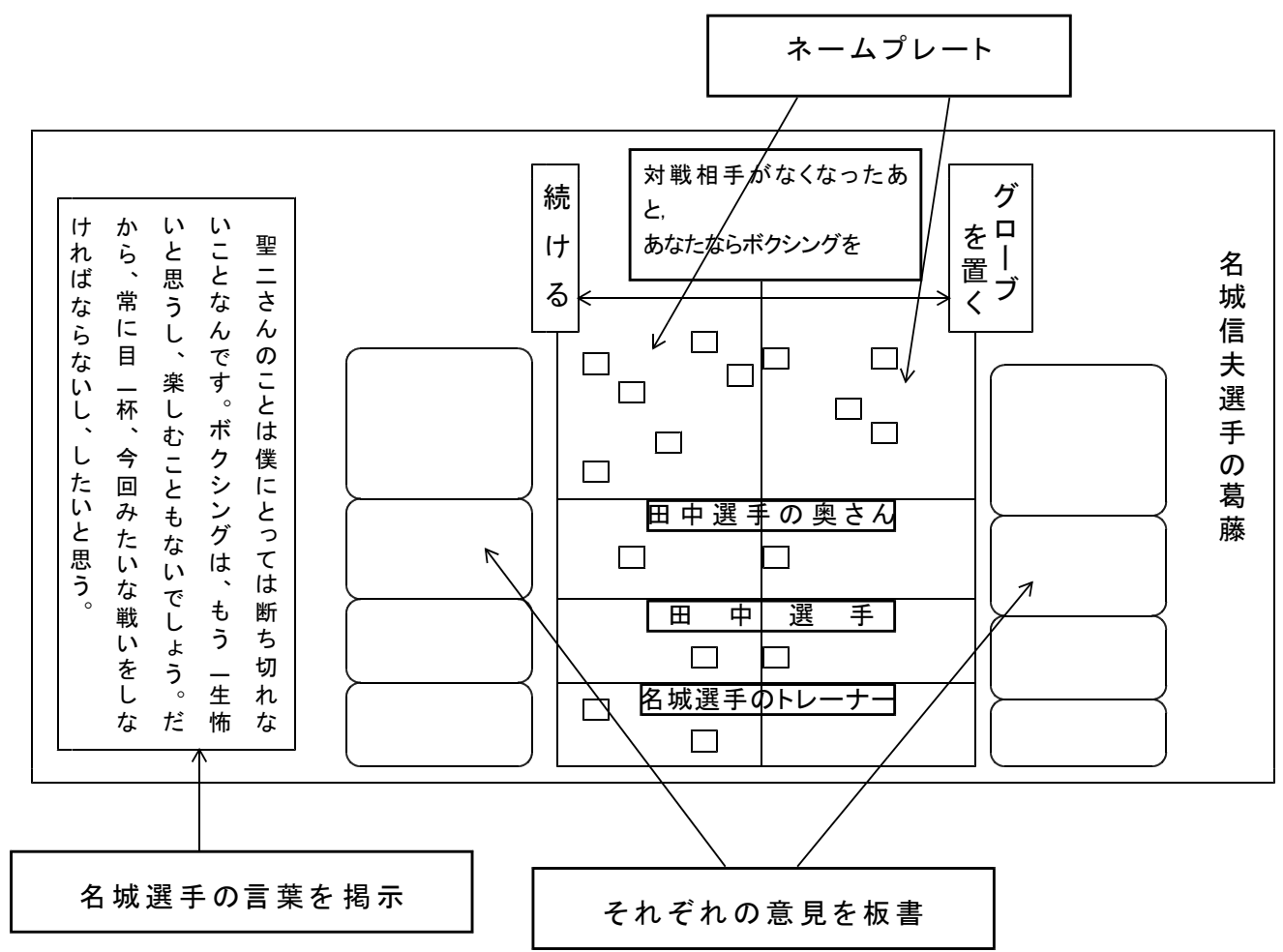
と、出席した。

あの最後の一発がなければよかったのか。レフェリーが止めに入るのが遅かったのか。すぐに開頭手術を行わなかった病院の処置が不適切だったのか。そして、いったい誰に何をおわびすればいいのか。中学・高校とけんかをしたこともなく、スポーツとしてのボクシングを純粹に楽しみ追い求めてきて男には、もう何も分からなくなった。その日以来、名城選手は奈良のマンションに閉じこもった。

参考資料 配付はしない。大きな紙に印刷し全体に提示し読み上げる。(

《世界戦を終えたあとの名城選手の言葉》
聖二さんのことは僕にとっては断ち切れないことなんです。ボクシングは、もう一生怖いと思うし、楽しむこともないでしょう。だから、常に目一杯、今回みたいな戦いをしなければならなし、したいと思う。

○板書計画



対戦相手の死を乗り越え世界王者になった

おのぶ 名城 信男 さん(24)
なしろ のぶ お

ひと



メキシコ人ボクサーを相手にTKO勝ち。デビューから3年、最短8試合でWBAスーパーフライ級の王者となった。「ジムの会長やトレーナー、つらい時に支えてくれた

友人にお礼を言いたい」試合数より、絶対勝たなければならぬ理由があった。

05年4月、日本王座に挑戦し、初タイトルを手にした試合後、対戦した田中聖(当時28)が倒れ、後日亡くなった。「なんで……」。リング上での応酬が頭をよぎり、自宅から出られなくな

た。ボクシングのことも考えなくなかった。2カ月後、「辞めるのは簡単。でも逆に失礼になる」と練習を再開したが、自分のパンチで相手

倒れると、「怖くなった」。今年2月、見に行った世界タイトル戦会場で、田中さんの両親から声をかけられた。「聖」の分まで頑張っ

い」。胸のつかえが取れた。生まれ育ちは奈良市。小学生の時、父親とボクシングを観戦。「男って、こんなすごいことせなあかんのや」。アマチュア時代は無名。「憧れを捨てられず」プロの道へ。シヨックは「完全になくな

ったわけではない」。だが、倒さなければ倒される世界。挑戦者らしく猛然とパンチを浴びせた。「聖」さんのためにも、自分のボクシングをやり尽くすことが使命。顔の腫れが引けば、鳥取市にある田中さんの墓前へ報告に行くつもりだ。

文 西原 正浩
写真 山本 裕之

朝日新聞 平成18年7月23日

○ 終末での資料（配付はしない。大きな紙に印刷し全体に提示し読み上げる。）

《世界戦を終えたあとの名城選手の言葉》

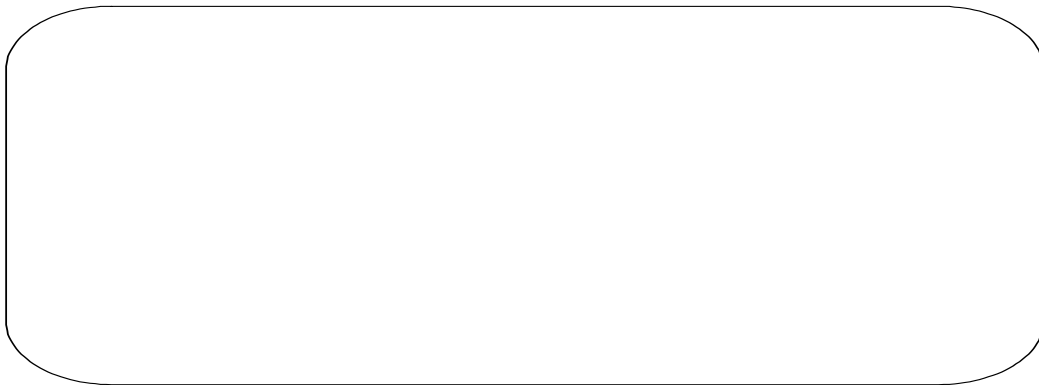
聖二さんのことは僕にとっては断ち切れないことなんです。ボクシングは、もう一生怖いと思うし、楽しむこともないでしょう。だから、常に目一杯、今回みたいな戦いをしなければならないし、したいと思う。

課題

シートA

- 対戦相手が亡くなったあと、あなたならボクシングを続けますか？
—ネームプレートの位置に☆を書き、
その理由をまとめましょう。—

ボクシングを続ける ← 100%	グローブを置く → 100%
------------------------	----------------------



- 今日の授業で感じたこと・考えたこと

※ ここに示したワークシートの他、ワークシートB（田中選手の奥さんの視点）、ワークシートC（田中選手の視点）、ワークシートD（名城選手のトレーナーの視点）を作成し、それぞれの立場から名城選手にどうしてほしいかを数名の生徒に記入させ、意見交換をすることで、名城選手のとるべき行動についての考えを深めさせる。